一周忌にあたって

大分県地方史研究会　会長　豊　田　寛　三

渡辺澄夫先生が逝去されたのは平成九年一月十五日十四時十五分であった。その三日前の十二日が奥様のご葬儀だった。その日、渡辺先生は喪主をつとめられた。先生は、私に、大分県地方史研究会を代表して焼香するように依頼された。その後、私は席を離れて橋本操六氏や末広利人氏たちと会話していた。そこへ渡辺先生が来られ、私の側に立ち、橋本さんたちに「豊田さん、どこにおるかのう」と言われた。

我々、一同思わず顔を見合わせた。だれかが「そこにおりますよ」といった。すると「ああ、ここにおった」「よろしく頼む」と言われた。私は「先生、疲れているな」と思ったが、その場はそのままにした。翌日午後に、「先生が倒れた」との知らせを受け、意識を回復することなくなくなられた。

先生と、二〇数年お付き合いさせていただいた私にとって、何度思い出しても最初で最後の異様な経験だった。いま、思えば、あのとき先生の脳血管は、少しずつ切れ始めていたのかも知れない。

先生のご葬儀の後、研究会の委員会を緊急に開催し、今後の会の運営方法と先生の追悼について協議した。会員を中心に、知音の方々による先生の思い出を集めたものを会誌の一号とすることは、即座に決まった。また、薫陶を受けた方々による「追悼論文集」の刊行についても全員の賛同を得た。その方法について協議をし、現今の出版事情などを鑑み、会誌二号の合併号とし、それぞれ小泊・飯沼の両委員が担当することとなった。皆様のご協力により、予定通り追悼号の刊行ができた。これも一重に渡辺先生のご人徳の賜物と思う。

ここに刊行した追悼号には、古代・中世・近世・近代にまたがる、それぞれ労作を収録することができた。いずれも渡辺先生にゆかりの深い方々の執筆になるものである。その内容も、先生の研究内容・方法などに大きな影響をうけたものである。今後の大分県地方史研究、日本史研究に大きな話題を投げかけるものである。私たちの願いは、お陰でほぼ達成できたものと信じている。

私たちは、先生の残した膨大な業績と多くの教えを受け継ぎ、さらに発展させていかねばならない。常に原点にたち、研究活動を継続し、一歩一歩進んでいきたいと思う。

なお、先生の蔵書・収集された史料のほとんどが、ご遺族のご厚意により、一括県立先哲史料館に収められ、先哲史料館職員の献身的な努力により、「渡辺文庫」として目録も作成され、後進の研究などに資されることとなった。全国的にみても多くの研究者の蔵書類が、没後、散逸していることを思うと、今後の大分県の歴史研究ひいては文化活動に、あかるい希望を与えるものである。

平成十年一月十五日